

* 「2位じゃだめなんですか?」

* この文章の締切は8月10日で、今日は8月7日、世の中はロンドンオリンピックの真っ最中です。今大会の日本は、金メダルの数こそ2個と少し寂しい状況になっていますが、全体的には幅広い競技種目での活躍が目立ち、「五輪初、悲願のメダル獲得」とか「XX年振りのメダル」といったフレーズが連日のようにメディア上ににぎわっています。実際に、メダルの総数で見れば、後半戦に入った今日の時点で28個と、前回の北京オリンピックの25個を既に上回りました。

* メダルを獲得した選手のインタビューを見ていると、それぞれの価値観を反映して様々です。ある選手は「金メダルをとりたかったので、銀メダルでは意味がない」と言って悔し泣きしていました。その一方で、たとえ銀メダルや銅メダルでも「本当にうれしい」と、涙を流して喜ぶ選手もいます。

* 結果として金メダルでなくてはだめなのか、何色でもメダルがとれればうれしいのか、入賞でもいいのか、あるいはオリンピックに参加できるだけで満足なのか、それは、各選手やその周囲の人々、あるいは、国としての強化策も含めた価値観の問題であり、その是非を一律に論じることはできません。しかし、多くのアスリートが、目標として「オリンピックでの金メダル」を掲げて日々の鍛錬を重ねている。そのことが全体としての競技技術のレベルアップにつながり、そしてまた、そうした人々の挑戦する姿に、多くの人々が感動し日々の活力を得ている、ということは疑いのないことだと思います。

* 科学技術の研究開発もまた、広い意味では世界全体での競争下にあります。そこでも、多くの人が、たとえ一瞬であって自分の分野において世界1位になることを目指して日々研究開発を行っています。新しい発見は世界で最初でなくてはなりませんし、新しい方法を提案すれば、これまでの方法と比較して、何らかの意味で優れていることを示さなければいけません。研究者は、日常的にそうした競争に参加しているのです。科学技術の研究者の多くが、スパコン「京」の開発に関してすっかり有名になった冒頭の言葉に違和感を感じたのは、自然なことだったと思います。

* そんなことを考えながらオリンピックを見てみると、会誌の一つの役割は、このオリンピックを伝えているメディアのようなものかもしれないなあ、などと思ったりします。科学技術の最前線で世界と競い合う人々の姿やそこから生まれている成果を分かりやすく、わくわく感や感動も含めて会員の方々にお伝えすること。そして、それが、多くの人々の日々の活力になるとともに、科学技術の裾野を広げることにつながるとすれば、編集に携わることになった一人として大変うれしいことだと思います。

* 本や論文を読むのは好きで、情報を収集して編さんすることも嫌いではないため、お誘いを受けて編集特別幹事を引き受けさせて頂きましたが、いざ始まってみるとなかなか大変な仕事であることを痛感しています。至らない点も多々ありますが、できるだけ多くの皆様楽しんで頂ける会誌となるよう、編集委員みなで力を合わせてゆければと思います。今後とも、温かい御指導御鞭撻のほど、何とぞよろしくお願い致します。

(編集特別幹事 麻生英樹)